

地域史を通して見つめた韓日の歴史交流 — 蔚山倭城と壬辰倭乱

ウルサンウェソン イムジンウェラン

ソン・ヘリョン(蔚山大松高等学校)

はじめに:韓国の生徒たちと日本の生徒たちがともに歴史問題について考える。

昨年度につづき2025年も私が所属する学校の生徒たちとともに、東北アジア歴史交流事業に参加することになった。3年連続で日本語クラスの担任を務め、韓日の歴史的対立問題により関心を持つようになったことも大きかったが、じつは、2024年の交流のために生徒たちが学んでいた「関東大震災時の日本人による朝鮮人虐殺問題」や「在日朝鮮人」についての生徒たちの探究心が冷めていなかったこと、そして、私もまた昨年の東北アジア交流事業をきっかけに構想していた壬辰倭乱の授業案をさらに発展させて授業実践してみたいという思いがあったからである。

じつのところ、それ以上に大きく作用したのは、私が知りたがり屋だからである。授業で独島の領土紛争、日本軍慰安婦、強制徴用など、韓日間の歴史的対立について教え、学ぶ際、我々が強く主張し相手を説得しようとする論調から脱却し合意点を見出せるのか、「味方」ばかりの教室ではなく「相手側」もいっしょにいる教室で新しい授業が実現できるのか、その答えを見つけないと思った。果たして、歴史教師である私と生徒たちは、本で学んだ歴史的対立の解決や平和、和解を実際に成し遂げることができるのだろうか。結果を確信できないまま、私と生徒たちの1年余りの旅が始まった。

蔚山倭城と壬辰倭乱を通じて平和を語る

蔚山の文化財でまず思い浮かぶのは最近ユネスコ世界遺産に指定された盤亀川の岩刻画だろうが、個人的に最も好きな遺跡は西生浦倭城と蔚山倭城だ。蔚山を訪れる機会もあまりなく歴史教師でありながら地域の歴史を熱心に勉強する方でもなかった私は、蔚山に壬辰倭乱と丁酉再乱の時期に日本軍が築いた倭城があるという史実を蔚山で歴史教師の会の活動をして初めて知った。韓国に日本軍が戦争のために築いた城があり、それが500年余りたった今でも残っていると、知ってみるとこれほど興味深い場所はなかった。ところが、生徒たちのほとんどは蔚山が故郷であり蔚山で育ったにもかかわらず、西生浦倭城と蔚山倭城の存在を知っている者がほとんどいなかった。西生浦倭城は蔚山の郊外にあり、蔚山倭城は、今は鶴城公園と呼ばれ市内の町の小公園としての役割を果たしているが、歴史に触れる主要なテキストである教科書ではほとんど言及されないため、生徒や保護者も散策がてら訪れることも少ないからである。

それにもかかわらず、日本の学校と互いの地域の文化遺産を紹介する場合には、盤亀川岩刻画ではなく、蔚山倭城と西生浦倭城を思い浮かべた理由は次の通りである。

第一に、蔚山倭城での島山城(蔚山倭城の別名)の戦いが、韓国の教科書ではほとんど言及されていないのに対し、日本の教科書では挿絵とともに内容が詳細に書かれているためである。これは、両国が戦争の歴史をどのように記憶しているかをよく示す事例だと考えた。我が国は壬辰倭乱に関する教科書の記述では自国が勝利した戦闘を中心に記述し記憶しようとし、日本は日本が勝利した戦闘を中心に教科書に記述し記憶しようとするため、このような違いが生じたのではないか。これを通して、韓国と日本が壬

辰倭乱をどのように記憶しているのか、そして現在を生きる我々は戦争をどのように記憶すべきなのかを考えることができる良い素材になると考えたからだ。



朝鮮軍陣図屏風（鍋島報効会）¹

第二に、島山城の戦いが前近代の戦争記述について新たな観点を示すことができると考えたからである。近現代史では戦争によって人間性がどんなに傷つけられるかを中心に記述され、戦争の残酷さが強調され平和を求めなければならないというメッセージを伝えている。しかし、前近代史では、依然として敵軍を撃破したことを誇らしげに記述し愛国心を鼓舞するという方式の記述が大部分である。一例をあげると、薩水大捷^{サルミナチゾ} [612年、高句麗が隋軍に勝利した戦闘：訳者]では隋軍の30万名の別動隊の内3千余名だけが生きて帰れたという記述を見れば、我が国がこの戦闘で29万7千名（高句麗兵士の死までを加えればより多くなるであろう）の死を思い浮かべるより敵軍を「殲滅」した我が国の勝利を強調するというように。私もまたこのような記述について大きな問題意識を持てはなかった。しかし、島山城の戦いは戦闘に参加した三国の軍人たちすべてが大きな犠牲を払った戦闘である。とりわけ加藤清正による蔚山倭城でのおごたらしい抗戦がいまだに語られているこの戦闘を通して、戦争の勝敗ではなく戦争自体の悲劇を語ることができるのではないかと考えた。

第三に、2024年の韓国史の授業で日韓両国の歴史教科書における壬辰倭乱の記述を比較した経験を通じて、生徒たち自身が共通の歴史記述が可能であるという自信を得たためである。1年生の韓国史の授業で、生徒たちとともに日本の教科書の壬辰倭乱の記述部分を読み、韓国の教科書との違いを比較する授業を行った（日本の教科書は、数名の生徒と日本語担当の先生の助けを借りて事前に翻訳しておいた）。授業の前に、生徒たちに「日本は壬辰倭乱を『侵略』や『侵攻』と表現しているだろうか、それとも『遠征』あるいは『征伐』と表現しているだろうか」とたずねたところ、大部分の生徒は日本の教科書には『征伐』という表現が使われているだろうと答えた。しかし、実際にいっしょに読んでみると、3種類の日本の教科書はすべて「侵略」という表現を使用していた。生徒たちの予想とは異なり、記述内容自体も韓国

¹ 『日本史探究』（清水書院）教科書収録

の教科書と大きくは変わらず、写真資料と歴史地図だけは観点が多少違っていただけだった。生徒たちは自分たちの予想と全く異なる日本の教科書を読んで大変興味が深まり、授業が終わった後には、ほとんどの生徒が「これくらいの違いなら、対話を通じて十分に共同の歴史記述ができるだろう」と語った。授業前とは明らかに考えが変わったのだった。

このような経験をもとに、「韓日両国は互いの考えを直接確認しないまま互いに推測しあっているのではないか、先入観にとらわれて相手を見ているのではないか」という質問を我々自らに投げかけ、交流活動を通して日本の生徒と平和と歴史について対話しようと考えた。

「平和のための出会い」がむしろ「対立」をつくり出すのではないかという気後れ

広島県のある高校との交流が決まった。相手校の担当教師は国語（日本語）の教師で、韓日交流と平和運動などさまざまな社会活動に積極的に参加されていて韓国に対しても大変友好的である。全部で4回のオンライン交流を企画したが、そのうち2回目の交流の時には、それぞれがくらしている地域の文化遺産を紹介することにした。日本の学校で壬辰倭乱と西生浦倭城、蔚山倭城を紹介したいと伝え、相手校からそれでいいという返事もらった。

さて日本の学校の反応を心配していた私の予想とは違って、最初の困難は身近なところから始まった。私のまわりの教師たちと校長、教頭はテーマを聞いて驚き、引きとめたのである。日本の学校は朝鮮通信使のような交流の歴史を紹介しようと考えていたので、私たちが壬辰倭乱のような戦争遺跡を紹介することによっていたずらに対立を生じさせないかという心配だった。やまとまわりの先生方を説得し生徒たちと発表の準備をしたのだが、今回も別の壁にぶつかった。まさに私たち自身だった。何よりも平和を追求し世界市民としての素養を持っていると考えていたが、準備する中で「倭」という単語がずっと口をついて出てきて私たちを苦しめたのである。

始まりは蔚山倭城をそのまま「蔚山倭城」と呼ぶことの問題だった。生徒たちといっしょに蔚山倭城を見学に行きそこで解説してくれた文化財解説担当者から、日本の生徒たちにこの城を紹介するにあたっては注意すべきだと聞いたからである。日本では「倭」という表現は日本を卑下する言葉と感じられるから、これは韓国の学界で使っている学術用語であることを説明し始めるようにという助言だった。この言葉を聞いて、私も生徒たちもみなどきりとした。昨年の授業では「壬辰倭乱」という用語の代わりに「壬辰戦争」という表現を使うようにして「倭」という単語を使わないようにしたのだが、いざ蔚山倭城の「倭」が問題であるとは考えていなかったからである。

その時から私たちは悩むようになった。蔚山倭城という用語が適切ではないと考えた場合、他の表現を使わなければならないだろうか、しかし「倭」をとれば日本人が築いた城という意味を伝えるのがむしろしくないだろうか、学術用語として広く使われているのだから了解を求めてそのまま使うのがよいのではないか、そうでなければ私たちがまず用語を変え蔚山城と呼ぶのが適切ではないか、などのさまざまな意見が出た。

日本の生徒たちの前で自分たちが直接発表するときに使う用語を決めなければならない状況に陥ったような討論だったので、教師主導の授業での壬辰倭乱用語の討論の時とはまるで違う緊張感だった。生徒たちはいつもの授業とは違い真剣に自分の意見を述べ互いの意見に耳を傾けるような討論がつづいた。ただ単に外国の生徒とつきあってみたくて考えて日本との歴史交流プログラムに応募した生徒たちが、歴史と平和に関して真摯に考え始める瞬間であった。結論として私たちは「蔚山倭城」という既存の用語

を使うことになり、悩んだことをそのまま日本の生徒たちに説明することに決まった。

今思えばこの一連の過程は生徒たちと教師である私がともに成長した過程であったが、その時はまったくこのように考えることができず、テーマ選びから用語の使い方までずっとまわりからの指摘を受けるたびに萎縮していった。自己検閲の沼にはまってしまったのだ。韓国語と日本語で作成した発表資料を何度も検討したにもかかわらず、パワーポイント資料のあちこちに「倭軍」という表現が見つかり、リハーサルの過程では台本にもなかった「倭の奴らが攻めてきた」という表現が生徒たちの口から無意識に飛び出すこともあった。検討を重ね、練習をつづけるうちに、生徒たちも私も緊張が極限に達した。

リハーサルを終え、さらに萎縮してしまった私たちは、平和のための出会いがかえって新たな対立の種になってしまうのではないかという不安に駆られた。「日本語に慣れていない私たちが、意図せず失礼なことを言ったり、知らず知らずのうちに日本を非難するようなニュアンスで発表してしまったりしないか」という不安から、生徒たちは次第に自信を失っていき、結局、発表前に日本の学校の担当の先生に発表資料を送り、検討をお願いすることになった。ところが、私たちの不安でいっぱいメールに対し、日本の先生からは次のような返信が届いた。

「用語に関するご懸念は十分に理解しております。私たちも、豊臣秀吉が韓国との関係を悪化させたことを説明していますので、今回の機会をむしろ感謝しております。私たちの学校では、日帝強占期を含め、日本が韓国に対してどんなに苛酷なことをしたかについても教えていますが、韓国側から直接説明していただく機会があることを嬉しく思います。そのような考えから、スライドの事前確認はいたしません。自由に発表してください。」

先生のメールは私たち全員に深い感銘を与えた。教科書の中では決まり文句のように感じられていた「開かれた心」とは何かを、その時初めて実感することができた。そして、日韓関係の改善には日本だけが努力すればよく、韓国には特に直すところはないと漠然と考えていた私たちの傲慢さにも気づかされた。

むすび：互いの苦しみに共感するとき、平和が始まる。

夏休みに日本の交流先の学校を訪問し、日本の生徒たちとともに広島平和公園を見学しながら、私と生徒たちは多くのことを考えさせられた。日本人はみな、私とは反対の立場にあるだろうと思っていたのは私たちの先入観であり、私たちと同じ考えを持つ人々がずっと存在してきたということは、朝鮮人慰霊碑について説明してくれる日本の生徒の姿や、韓国人の原爆被害者のために活動されている高齢の日本人活動家との会話の中で確認することができた。また、祖母が広島原爆被害で苦しんだという日本人生徒たちの話を聞き、広島平和公園に残る戦争の痕跡を見ながら、戦争は私たちだけに痛みを残したのではなく、すべての人間に悲惨さだけを残すものであるということ、自分の目で直接見て感じることもできた。「平和はただ与えられるものではなく、互いの痛みを理解し共感することから生まれるのだと感じた」という参加生徒の感想は、1年間の歴史交流を最もよく表している言葉のようだ。

蔚山倭城で始まった私たちの悩みは、広島で答えを見出し、幕を閉じた。私たちは壮大な平和について語ったわけではなく、互いの話を聞き、痛みを理解しようと努めただけだったが、もしかすると平和とは、まさにそのような小さな努力から始まるものなのかもしれない。生徒たちとともに歴史の授業を通じて、単に過去を学ぶことを超え、互いを理解し、ともに生きていく方法を見つけることこそが、私たちに必要なことではないかと考えるようになった。最後に、今回の歴史交流の意義を最もよく表している生徒の感想文を、ありのままに示しみなさんと共有し、この文章を締めくくりたいと思う。

今回のプログラムに参加して学んだことも感じたことも本当にたくさんあるが、その中でも最も記憶に残っているのは、実際に日本へ行き、広島の実爆ドームや平和記念公園、平和記念館を訪れた活動だ。そこで、今日は、広島での交流活動を中心に感想を書いてみたい。原爆ドームを見学し、平和記念公園を訪れて犠牲者の慰霊碑で黙祷を捧げた後、近くの平和記念館を訪れた。記念館には、投下された原爆に関する説明から始まり、行方不明になったり犠牲になったりした被害者たちの衣服や日記など、数多くの人々が苦しみもがいた痕跡が展示されていた。そして、それらの物語の終わりにさしかかったところに、展示室の壁に大きく書かれた「生きる」という文字を見つけた。「生きる」という意味のこの三文字の後ろには、ある女性の成長過程をとらえた写真がずらりと並んでいた。いっしょに展示室を見て回っていた日本人の友人が、これはあの事件の被害者の写真だと説明し、教科書にも載っているから日本の生徒ならほとんどが知っている話だと付け加えた。

韓国に帰った後も、「生きる」という言葉がずっと心に残っていたのだが、なぜなのか、2 学期の韓国史の授業でその理由が分かった。韓国史の授業で、老斤里事件^{ノグンニ} [朝鮮戦争中の 1950 年 7 月、忠清北道老斤里で起きたアメリカ軍による韓国民間人の虐殺事件：訳者]と四・三事件^{サムサム}について学ぶことになった。この二つの事件を学びわかったことは、国家が介入したり助長したりした暴力は、悲劇が起きた瞬間に終わらないという点、そして生存者たちをどのように記憶し、向き合うかが極めて重要であるという事実だった。記念館内の数多くの衝撃的な展示の中でもなぜその展示だけが強く記憶に残っているのか、その瞬間に気づいた。単に凄惨な苦痛を見せるだけで終わらせず、被害者の人生がその後どうつづいていったのか、なぜ私たちが彼らを記憶し、向き合わなければならないのかを示していたからだ。今でも、このできごとが単に批判されるべき事件なのか、それとも避けられない選択だったのか、その責任は誰にあるのか、判断がつかない。それにもかかわらず、これによる被害者たちに同情と憐憫を感じ、彼らの苦しみを見無視してはならないという事実だけは明らかだと考える。記念館を見れば見るほど、戦争というものが無意味な虚像であるという事実を痛感した。人の上に思想や土地が存在することはできず、それ以外のすべてのものもまた、人の生命の上に立つことになれば無意味なものなのだという考えが浮かんだ。

感想文を書き終えようとしていたときに学校で見せられた独島教育の映像に、広島の実爆ドームと平和公園が登場した。映像では、日本が帝国時代に犯した過ちをただ「平和」と呼ぶことに対して懐疑的な見解が示されていた。その後流れたコメントの方がより強く記憶に残っているが、日本が誤った歴史教育をつづけることによって、80 年前の日帝時代に生徒たちに対して行ったのと同じように、生徒たちを教育しているという内容だった。しかし、私が今回参加した北東アジア歴史交流活動のように、両国の歴史認識の違いを認識し、対話を試みるようとする機会が存在すること自体が、私たちが少しずつ平和へと向かっているということではないだろうか。広島の高校でともに笑いながら語り合った時間の中で、私は確かにともに歩める未来を見た気がする。もしかすると、平和という概念は、私たちが考えてきたほど遠くはないのかもしれない。互いに異なる国から踏み出した歩みが、交差点に向かって進んでいる。隔たりはすでに少しずつ、少しずつ狭まりつつあるのだ。

	
生徒たちの発表資料	韓国史の授業の学習プリント

[左の QR コードからは、オンライン交流で生徒たちが発表した蔚山倭城と西生浦倭城についてのパワーポイント資料が見られる。なお、資料では韓国語と日本語が併記されている。

右の QR コードからは、教師が作成した蔚山倭城と壬辰倭乱についての韓国史の授業プリントが見られる。長文なので今回は翻訳を割愛した：訳者]

<訳:平野昇>